経済の力は自由にあり（1）

ソ連経済のあり方

ワレンチン・P・フョードロフ
小川政邦 訳

急進的経済学—なぜ？

よりよい生活は個々人や人類全体に特有の願いである。長期のスパンで見れば、この願いは実現しつつある。しかし、発展途上には挫折もあり、そのようなときには生活水準が数段階下がり、再び以前の水準に達するためには何年も必要になる。そのようなことは戦争や政治的大変動の結果だけで起きるわけではない。経済は平和時にも部分的な自己崩壊に遭うことがある。

諸国民はさまざまな社会経済システムや政治体制のもとに生活しており、これらのシステムや体制の信奉者たちは自己主張のためにその配下にある知的潜在力のすべてを利用するのが常である。イデオロギーは（稀れには）社会的意識を啓蒙できるが、（むしろ頻繁に）あいまいにさせることもできる。イデオロギーが国家権力と手を組んで行動するとき、しばしば経済が犠牲になる。従って、イデオロギーはそれがどんな衣装をまとっていようともアプリオリに信じてはならない。イデオロギーが進歩を保障するのではなく、現実の発展がイデオロギーの進歩性を保障するのである。

新旧の教科書とか図書や研究書で語られてきたわれわれの伝統的経済学はすっかり面目を失ってしまった。それは国民のための最も重要な経済建設の諸問題を解決する能力がなかったし、今では国内経済危機の克服の上で驚くべき無力さを示している。

現在、経済にたいする新しいアプローチの必要性が痛感されており、それはイデオロギー的ドグマの徹底的な放棄を前提としている。頑迷なオーソドックス連中(保守派)の生半可な経済学と一線を画すために、わたしは実際的経済知識の総体を急進的経済学と呼ぶ。それは鮮やかに表現された科学的実際的性格を帯び、抽象的真実にたいする具体的真実の優先、イデオロギーにたいする客観的現実を認める。現実的経済学は階級的ないしは民族的性格にかかわりなく社会的再生産の認識に反映される。

急進的経済学という概念の本質は以下の点にある。すなわち、わが国にある資源はソ連人の高水準の物質的精神的富を作り出すのに十分である。しかしこの可能性はほとんど活用されなかったし、現に活用されておらず、住民の利益にかなっていないこともしばしばである。その罪は経済と社会の指令的行政的運営システムにあり、このシステムは数十年にわたって新しいタイプの人間、つまり従順なだけの、主体性のない、自分に押しつけられた紋切り型の尺度だけで物を考える人間を育成してきた。このシステムはこの育成事業を完遂するまでにはいたらなかったが、時はいたずらには過ぎなかった。人々の世界観と道徳性はデフォルメされ、現実生活の評価に二重の基準が定着し、労働者の創造的意欲が少なからず抑えつけられ、理論面で方向感覚が失われた。このようなことはすべて当然システム全体の変更を求めるものである。

わたしは、わが国では社会主義が建設されたという主張には断固反対である。スターリン時代と停滞の時代のこの誤った意見からは決定的に、かつ出来るだけ早く解放されなければならない。社会主義建設――人類のこの偉大な目的――は多くの世代の事業であり、それに到達するのはソ連人が最初ではないことも十分あり得る。われわれは一九一七年以後建設的課題ではなく、破壊的課題の解決に時間の大きな部分を費やしてしまった。われ

われのところに社会主義はないという事実を認めると、特に私有制を含めて経済における多構造性の必要性などのような多くの問題に別のアプローチをすることが可能になる。現実が示すように、現代世界における私有制は経済的にも政治的にも道義的にもすたれてはいない。私有制にたいしてわれわれの間に実在するネガティヴな態度はまぎれもなくイデオロギー的観念に基づくものであり、他のすべてにたいするこのイデオロギー的観念第一主義が、今やだれの目にも明らかなようにわが国を袋小路へ導いたのである。この袋小路から抜け出す道は国の生産力の解放と自然な自己運動にあるが、ではそれがどのような形で行われるかということは国民の民主的意志表示という方法で決められなければならない。

わたしは、われわれが有する資源が経済の健全化に十分であることを認めるものであり、高い価格で提供される外国の援助に過度に目を奪われることには反対である。祖国の問題を解決せんがために西を向くのは、益よりも害をわれわれにもたらすだろうとわたしは見る。

わたしは、あたかもわれわれにはペレストロイカのために十分な訓練を受けた要員がいないかのような、失敗は「人的要因」によるものであるかのような、そしてまるで国民は働くことを欲しないかのような、公式すじの名においてよく繰り返される言明にも同意しない。このようなことすべてにたいする責任は国民にではなく、現存する不合理な経済、社会秩序にあり、この秩序が人々にまともな生産的労働をやめさせてしまったのである。いま挙げた言明は明らかに発言者のためにうそのアリバイの役目をし、依然として温存されているイデオロギー優先を現実生活を犠牲にして隠蔽するためのものなのである。

現代資本主義に関する伝統的評価の根本的見直し、「搾取」、「死にかけ腐りつつある資本主義」、「資本主義の歴史的位置」、「帝国主義」などの概念の根本的見直しも必要である。

「急進的経済学」という術語は別に新しいものではない。この名称は、西の経済学の左派につけられた名称だが、この左派たるや西で支配的な国民経済運営に関する科学的理論的観点や実際的方法とは著しく掛け離れた存

在なのである。筆者は西方諸国の急進的経済学の代表数名と多くの緊急問題を討議したことがある。二点について指摘したい。まず第一に、西には単一の一貫した急進的経済学が存在すると言えるだろうかということである。それは国によって本質的な差がある。それは海の泡や抽象的論議から生まれたのではなく、それぞれの国民経済の内部的困難、緊急問題にたいする反作用として生まれたということで理解できる。第二に、西の急進的経済学はときには非常に急進的なので、その見方は後述の考え方よりも遙かに左にある。それで、西の急進的経済学との接触が望ましいことは分かっていても、その接触がお互いを豊かにし、双方に実りのあるアイデア交換になるという観点からすれば必ずしも常に可能という訳ではないことを認めざるを得ない。

資本主義と社会主義・われわれはどこにいるのだろう

われわれが現在、思想的茫然自失に落ち入っていることを証明するものは、社会主義と資本主義の間の境界線の消滅である。われわれは七十年間たなごころに水を溜めて、その水を肌に感じていたのに、水は突然指の間から漏れ落ちてしまった。実際、動揺する理由はあるのだ。今やわれわれは、われわれのところに作られた社会は「完全に最終的に勝利した」とか、「発展を遂げた」とか、「現実の」とか、どのような形容詞をつけてみても社会主義とは呼べないということを日増しに強く認識している（ここに挙げたような公的な定義のほかに、社会主義はただ一つ―真正社会主義―しかないのだが、他人まかせ的社会主義、官制社会主義、国営社会主義、兵営社会主義などいくつか別の定義も存在する）。われわれは心の中で社会主義に非常に愛着を持ち、その具現化を目にすることを渇望していたので、むしろよその国、すなわち、そのような定義に値する幸福に見舞われたことを自分自身は知らないでいるスウェーデン、オーストリア、フィンランド、ノルウェー、オランダ、スペイン、カナダ、スイスなどの国々に社会主義を認知していたほどである。

I

ところで先ずは自分自身を眺め、それからわれわれは

誰であり、われわれは真の科学的見地からすると何に属するのか自問してみよう。答えはわれわれがどのような座標軸を選ぶかにかかるだろう。わたしの大学院生時代にはネオリベラリズムの西ドイツ派が強力なイデオロギー攻撃にさらされていた。学者たちはこの火炎放射器の疾風射を使って、もちろん上からの命令で、経済史上「西ドイツの奇跡」となったドイツ連邦共和国の経済の成功に関する知識をわが国の人々の意識の中から吹き飛ばそうと試みていた。ついでながら、ひとことで言うと、西の実際上の成果に触れるときわれわれの反西欧プロパガンダは常にフル回転し、白熱化した。すなわち、西の成果はわれわれの無能な理論家たちの頭に血をのぼらせ、一方、自国の失策は大々的な勝利のファンファーレで償われた。ドイツ民主共和国のわれわれの友人の宣伝家たちは「ロシアの奇跡」というデマを飛ばして能う限りわれわれを助けてくれた。かように、ネオリベラリズムは自由方式と強制方式という二つの経済方式を区別する。古代専制政治も、ヒトラーのファシズムも、スターリンの「社会主義」もこの二番目の非能率的方式に入る。わたしやわたしと同年代の者は、われわれの権威たちがその著述でこのえせ科学を木っ端みじんに粉砕した書名のいくつかをそらんじており、われわれは今や原典を引用せずにそこから利益を引き出している。たとえば多元論の概念などが想起される。

ではマルクス主義的規範とはどうあるべきか。もちろん、われわれのところには資本主義はないが、さりとてわれわれを取り巻く現実を社会主義と呼ぶのは恥ずかしいだけだ。となるとわれわれは何を持っているのか。われわれは実際に見通しのない歴史的発展形体を持っている。少なくとも今日まで持っていた。一九一七年に資本主義の道から逸れたが、過ぐる七十年間に社会主義にはあまり近づかなかった。指導部が選んだ資本主義から社会主義への移行期は開始において失敗し、国は掲げた目的から別の方向へ去り始めた。現在われわれは後退し、ソビエト政権の初期に克服すべきであった問題を解決しようとしている。レーニンはきわめて速やかに認識して、これはそれに劣らず重要なのだが、社会主義に関する書物上の概念が現実生活に移される際に犯された過ちを公

に認め、一九二一年からは彼の見解の著しい進化が見られる。レーニンのときでさえわれわれは四年を失い、レーニン以後は一九八五年に到るまでの残りのすべての年を失った。時間喪失の問題にはさまざまなアプローチがあり得る。例えば、M・S・ゴルバチョフは一九八九年十月に経済専門家会議で、われわれは最低十五年失った、なぜなら七〇年代初めに科学技術革命とそれへの社会主義の適応に関するソ連共産党中央委員会総会が開かれなかったからだと述べた（「プラウダ」一九八九年十月三十日）。

われわれを襲った悲劇の原因は何にあるのか。それは社会の自然な前向きの発展にたいする粗暴で傲慢な干渉にあり、その結果、わが国は歴史の石臼の中に放り込まれてしまった。

ロシアの革命家たちはマルクスの資本主義滅亡の図式を自国に応用しようとしたが、この国はその図式には全然適していなかった。ロシアの果実はまだ熟していなかった。マルクスによれば、社会主義はそれ以前の任意の生産方式と同じように過去の発展の極致である。すなわち生産力は、生産関係がそのいっそうの高揚の障害になるほどの極めて高度の水準に達する「べきであった」。しかしロシアは正に低水準の生産力と発達不十分な資本主義で際立っていた。ましてや一九一七年のロシアは遅れた国だった。今日の超大国ナンバーワンのアメリカ合衆国でさえマルクスの図式までたどり着いていない。ああ、ロシアの革命家たちは、米ソ間の差が今日最低三十年であるとするなら、少なくとも百年の誤差で自然な事態の進行を飛び越え、ゆがめ、デフォルメしたのであった（そしてそれはもちろん全然功績などではない）。

革命家たちはこの歴史的症例を矯正し、社会主義を上昇線に沿った社会の客観的かつ長期的運動の終点ではなく、自分たちの手と精神の創造物として描き出すことに決めた。社会主義も資本主義も含まない国家生産方式が発生した。そのかわり数千万人にとっての奴隷制度（GULAG―矯正労働収容所総管理本部）があり、農奴制封建主義（パスポートのないコルホーズ員）があった。

十月の実験の悲しい結果は邪悪な意図によるものではなく、先ず何よりもボリシェビキ、つまり党の前衛が革命の対象である国に関して、自然な歴史的歩みを偶然的かつ「不必要」な偏向のない論理的モデルに変える可能性に関して、理論上の思い違いをしたことによるのである。われわれは今日このことを苦くはっきり鮮やかに理解する。すなわち、人間の理性は現実生活の、いわばヘーゲルの絶対的「世界精神」の複雑な絡み合いや法則性と競い合うには余りにも弱いのだ。公平を期して言うと、祖国の個々の思想家たちは先走りにたいして警告を発していた。このことには今感嘆を禁じ得ない（A・ゲルツェン『革命まではなるべく多く自由を「貯える」べきだ。そうすれば革命はより容易になろう』。A・G・プレハーノフは十月革命を全く受け入れなかった。彼は『ロシア史は、いずれ社会主義の小麦のピローグ［ロシア式のパイ］を作るための小麦粉をまだ挽いていなかった』と考えていた）。彼らは自分たちの図式を提案した。これらの図式は成立しなかった歴史の謎である。

レーニンの後、国の発展の道は二つ可能であった。最初の道は実際上、国が一九一七年十月から一九二一年まで歩んだ道の繰り返しで、そのとおりになされた。その特徴は経済の国有化と強制である。

レーニンはかつて新経済政策（ネップ）への移行を主張した。この政策は個人の企業活動を許した結果、実務的活力を復活させた。この路線の継続はもうひとつの可能性、未知の未来へソ連が進む第二の道を意味した。

しかし、われわれの未来は本当に未知のものだったのだろうか。

ネップが十五年か二十年続けば資本主義の再生は避けられず、十月革命の合目的性の問題がおくればせに提起されたであろう。しかも新しい資本主義のラウンドを実現する機能はボリシェビキよりもブルジョア政党、ブルジョア民主政党その他の多くの党がずっと着実に発揮出来ただろう。ひょっとすると、例えばストルイピンのような君主制路線の建設的伝導者を念頭に置くならば、君主制自身それが出来たかも知れない。歴史のパラドックスは、革命家たちがネップを推進しようとすればするほど、自分たちの「ボリシェビキ性」を喪失したであろうという点にある。しかしその際にも彼らは、競争相手の諸政党の設立に反対できなかっただろう。それらの政党

は、経済とそれに伴う社会的デモクラシーのマルチ機構のもとで遅かれ早かれ全ロシア共産党（ボリシェビキ）〔VKP(b)〕を政権から駆逐してしまったかも知れないのだが。結果的に国は文明国にとって典型的な状態となったであろう。

俗流マルクス主義の担い手だったスターリンは、ネップの道を進むことが自分の党のイデオロギーと権力それにもちろん自分個人にとり危険で、悪夢だということを理解していた。彼の個人的野心は当然、党が永久にしっかりと支配の舵についた場合にのみ実現できた。彼は党の利益を擁護するときは自分流にマルクス・レーニン主義の創始者たちの見解から力を汲み出した。自己の個人的簒奪行為に関しては、彼はそれを党の独裁を恒久化する必要性によって正当化し、自分をその必要性の最良の実現者とみなしていた。教養の低いマルクス主義者である彼にとってネップの継続は一九一七年十月の裏切りであり、実行可能になるやいなや遅滞なくこの後退を終わらせてしまった。「すべての民族の指導者」は十月の意義の公正な分析を未然に防いだ。なぜなら、繰り返すが、ネップが十五年から二十年存在したなら、事態は十月以前の発展と合流してしまい、革命はある社会体制内での平凡なクーデターにすぎなくなったであろうからである。スターリンはマルクス・レーニン主義の創始者たちの指示を実行に移しながら、国がネップ路線で発展することを自分の考えで拒否し、初期のレーニン――初期のというのは年令の意味ではなく、社会主義の理解度の意味で――に戻った、すなわち、一九一七―二一年の政策に戻った。この政策は当時成功はもたらさなかったので、ネップ後の時代のスターリンの「古い経済政策」の結末も予め見えていた。

強制は国にとり経済的に非効率的である。多分、つい最近面目を失ったばかりのこの道に前途のないことは具眼の士には明らかだったが、スターリンにだけは明らかではなかった。つまり、スターリンにとって十月以後の四年間は、社会主義に対する視点を変える必要性を認めたレーニンがしたように勉強し直すには余りにも短かすぎた大学であった。ブハーリンがスターリンについて言ったように思うが、スターリンは『資本論』を読んだが、

理解はしなかった。実際はもっと悪かった。スターリンは理論的マルクス主義を自己流に理解し、自らその解説者を以て任じ、鉄と血で教義の実践を始めた。

現在われわれはスターリン時代から受け継がれた行政指令システムを批判し、かつて通過したものを繰り返す、すなわち現代の条件下でのネップに移行しようとしている。われわれは必要な変革を自覚している度合いでは一九二二年の水準に近づいているが、ただこの変革を実現するのは当時よりもずっと困難である。問題の本質から眺めれば、二〇年代の初めには急速な高揚のためにはもっと良好な前提があった。つまり、農民には土地があったから……企業家的遺伝プールは失われておらず、住民の気持ちは全体的不経済や労働に対する無関心で堕落させられていなかった。今はこれらの困難をすべて踏み越えるのは難しいが、われわれは早晩それをしなければならないだろう。

今のところはペレストロイカを実行しながら、もしもわれわれが不幸を欲しないのなら、どんな場合でも一か所で足踏みをして古い路線を防衛しよう（意識的または、よくて無意識に）などと試みてはならない。欲すると否とにかかわらず、スターリンの遺産はわれわれの「資産」である。われわれの実際的な活動を麻痺させているこの精神的くびきから脱出するか、さもなくば一九一七―二一年とレーニン後のように高邁な目的である社会主義によって正当化されるであろう強制の深淵に三たび身を置く危険をおかすか。

弁証法的進展は、今われわれは後退しつつ、前進しているということなのである。比喩をお許し願いたいのだが、われわれはカフタン（長裾の上着）を着ながら、最初のボタンからほかのボタンまで次々にかけ違えたのだ。現在われわれは最初の宿命的な点（もちろん、新しい螺旋の回転の）に戻りつつあり、そこから再度社会主義へと出発するであろう。われわれはアリアドネーの糸なしに迷路を行くことになろう。

社会主義の存在を否定しながらも、わたしはこの先「社会主義諸国」、「社会主義の世界」その他の現行の用語を使う。しかし、これは便宜上だけのことで、ちょうど無神論者がキリストの存在を認めないでいながら、その信

奉者をキリスト者と呼んでいるようなものである。

II

われわれが今日まで読んだり聞いたりしながらも、失礼なほどほとんどその真実を知らない現代資本主義に目を向けて見よう。資本主義に関するわれわれの概念の基礎は全体として上等で正しいのだが、前世紀の『共産党宣言』と『資本論』が土台になっている。相続く資本主義の進化は初期から後期までわれわれの社会科学では否定的意味の説明がなされてきた。これにつけ加える事実が思い出されるのだが、イギリスの勤労者の絶対的貧困化について講演するため比較的最近渡英したあるソビエトの教授は、イギリスの労働者に関するエンゲルスの有名な論文から今日につながる糸を引っ張って見せた。マルクス・レーニン主義の創設者たちを引用するのは――粗雑かつ直線的にだが――、わが国ではあらゆる点で常に教養のしるしと礼儀であるとみなされてきた。

われわれの生活全体を包み込んだペレストロイカの過程で、自己の正当性を証明できなかったイデオロギー的観点は次々に過去の彼方へ立ち去っている。これには「死滅し、腐敗しつつある」資本主義に関するドグマも含まれる。物事の当然の論理として、新しい世代はより高い認識と経験の段階へ上がり、いっそう高い教養を身につけるはずである。どの世代にも独自の行動を編み出せるすぐれたリーダーがいるとは限らないわけで、そうなると従来の見方が聖書のように時代から時代へ受け伝えられて行く。

V・I・レーニンはマルクスの教義をいくつかの本質的な点で発展させ、特に一九一五年には社会主義革命が先ず数か国または一国ですら勝利する可能性があるという結論を出した。一九一七年十月後、革命家たちは先進諸国での資本主義の速やかな崩壊を待ち受けた。そして当初、そのような気持ちには一定の根拠があるように見えた。しかし、一国革命の世界革命への転化は起こらず、撤退合図を出す羽目になった。理論面ではイデオロギーの擁護者たちは今日まで戦場を去らず、多くの者はまだ前々どおりの頌歌を歌っている。現実が真理の基準であるなら、現実はわれわれに次のような問題について考えさせるはずである。すなわち、なぜ資本主義は死滅もせず、弱まりもせず、その逆に強くなり、その可能性を伸ばしたというのに、片や、社会主義諸国は外部からの妨害もないのに自らの基本的生存のために戦うことを余儀なくさせられているのかという問題である。問題の第二の部分、社会主義に関してはしばらく脇へ置き、最初の部分に触れて見よう。答えは明らかに、われわれが資本主義の可能性とその歴史的展望を正しく評価していなかったことにある。このような評価を理論内に温存することはあらゆる関係で大きな害をもたらし、何よりも、国際舞台でのわれわれの公式声明の誠実さに疑念を起こさせることになろう。つまり、戦略上パートナーのせん滅に的を絞っているのなら、西との協力に関する東の戦術的マニューバーは信用に値するかということである。「われわれはあなた方を埋めてしまう」という悪名高い表現は、たとえ響きは悪くないとしても、偶然生まれたものではない。これは、プロレタリアは資本家の墓掘り人であり、社会主義は資本主義の墓掘り人であるという表現なのである。

われわれは西に対して、人類の前には、生き残るという最重要課題があり、そのためには新式に思考し行動しなければならないと説くが、これと同時に、われわれは理論面では、資本主義の運命は定まっており、最終的に資本主義を待ち受けているのは破滅であるということから出発している。われわれにたいして同じように振る舞うパートナーがいたとしたら、われわれはどう思うだろう。反論されるかも知れないが、問題は長期のプロセスに関してであり、ブルジョア・システムが今日か明日かのうちに消え去るなどと考えている者は一人もいない。しかし、先ず第一に、つい昨日までは正にそのように考え、根気よくそれに基づいて政策を立ててきたのである。第二に、もしもわれわれが自国内の進展を一年先すら予見する状態になく、事実上、自分の五か年計画を一つとして遂行しなかったということであれば、世界の事態の歩みをあえて予見するなどということがはたしてわれわれにできるだろうか。

第二十二回ソ連共産党大会で採択された党綱領の命題はすべての者の記憶にある。すなわち、一九六一―七〇年にソ連は共産主義の物質的技術的基礎を作り、国民一

人当たりの生産で資本主義の最も強力で豊かなアメリカ合衆国を追い越し、第二次十か年計画の一九七一―八〇年には国民全体にあり余るほどの物質的文化的富を保障する共産主義の物質的技術的基礎が作られ、ソ連では基本的に共産主義社会が建設されるであろう。党綱領の新しいテキストでは両体制の競争の量的時間的パラメーターを特徴づけるこのような言明は取り下げられたが、問題の戦略的解釈での決定的前進はなかった。

わたしはどのような比較指標も出すつもりはない。そのようなものは今不必要である（括弧の中で言うのだが、資料の捏造や隠蔽にすこぶる長じたわれわれの統計ですら、人もうらやむ資本主義の活力を否定はすまい）。自己欺瞞としか名づけようのない観点を根本的に解釈し直すことが今求められている。古典的資本主義諸国は、アンタイオスが大地との接触から力を得たように、科学技術革命から首尾よく力を汲み出しており、また、科学技術革命は最近数十年間に計り知れないほど生産力の水準や人的物的要因を向上させたが、決して西方諸国を「老朽化」した生産関係から解放しようとはしていない。多分百年か二百年後にはこの関係が実際に古くなるであろうが、そのときには現在のわれわれの教科書が役に立つだろう。われわれが自分たちの問題解決を試みる中で、目下のところ別種の傾向がますますはっきりしつつある。われわれはブルジョアの著者たちが書いた教科書を参考にしている。最近ソビエト経済学のリーダーのひとりがプレハーノフ研究所内で明かしたのだが、彼は毎晩アメリカのサミュエルソン教授の作品を熱心に研究しているとのことだ。

現代資本主義を批判する際、しばしば多国籍企業の支配がうんぬんされる。独占が停滞と腐敗に通じるというのは正しい（そのあらゆるマイナス面をわれわれは自身の経験で知っている）。しかしもう一つ、競争が市場経済に前進を保障するということも正しい。今日では、独占ではなくて、健全な競争が正に資本主義の性格を決めているのである。

資本は、われわれが知っているように、資本主義の卑しむべき基礎を成しているが、しばらく以前から世界の統計は、社会主義諸国の在外資本と社会主義諸国にある

外国資本という新しい二つのグラフで満たされるようになった。われわれによって宣伝され、時々は武器の助けを借りて後押しされていた世界の革命プロセスは、後退とは行かないまでも立ち止まってしまった。今はその今後の歩みを予見することは難しいが、われわれは二つの社会・経済システムが長期にわたり隣接して共存する定めであることを考慮しなければならない。イデオロギーの言葉ではわれわれは今のところ、このような共存を「全世界的規模における資本主義から社会主義への移行」と称している。われわれのところではすべてが必ず科学的なのだ。すなわち、われわれの気に入らないシステムの崩壊の不可避性だけでなく、「資本主義の安定化」、「適応性」、「生存率」などという概念を導入して、その途上の停滞をも科学的に説明するのである。留保条件はもちろん常に必要である。それは現在生じていることに均衡のとれた姿を描いて見せる助けになるが、われわれの場合は理論の基本的内容ではなく、このような留保条件だけが自分に自信をつけてくれるのである。

われわれは以前から資本主義の歴史的位置をすでに決めていた。それは歴史のはきだめにある。しかし一体なぜ当時、われわれはそのはきだめであれほど喜んで奉仕を受け、われわれにそれを許さなかったとき、すなわち、国際舞台での非文明的行動にたいする戒めに低利クレジットを奪い、禁輸やボイコットを宣言するなどの形でわれわれを罰したとき、なぜわれわれはそれを怒ったのか。なぜまさに英語が世界中のコミュニケーションの手段、東西での二番目の言語になり、ロシア語はわれわれの友好諸国ですら学ばれなくなっているのか。そして、なぜ、世界はわれわれのクワス、ペリメニ、ブリンを採用しないというのに、われわれは人さまの助けでペプシ・コーラやピザそれに今や輸入のハンバーガーをせっせと国民にふるまっているのだろうか。このような「なぜ」をわれわれひとりひとりがたくさん出せるはずだが、それには全部共通の根があるので必ずしも個々に答える必要はない。

われわれは、現代文明に決定的貢献をしているのは残念ながら他の社会的システムだという真理を完全に認識しているだろうか。もちろん、ソ連は最初に地球の人工

衛星を打ち上げ、人間を宇宙へ送り、最初に原子力発電所を建設したが、西も多くの科学技術の分野で、それもはるかにずっと多くのことで一番乗りを名のれる。ところで今日、われわれはかつて自分が世界の進歩の中で占めていた参加の度合いさえ失いつつある。その数字は挙げないが、ログノフ ソ連科学アカデミー副総裁の評価だけ引用しよう。以下が同副総裁のことばである。「質的指標に関する革命前ロシアの学術的潜在力は西の先進諸国の潜在力にひけを取らなかったが、現在その差は開く一方になった」(「プラウダ」一九八九年八月七日)。

われわれの民主主義の水準に関してなぜかまだ誤解している人たちには、全体に不手際だったソ連人民代議員大会後、西の議会メカニズムについて取材する任務を帯びた資本主義諸国駐在ソ連特派員が理解を助けてくれる。特徴的なのは、一九四八年に国連総会が採択した『世界人権宣言』がわれわれのところで公表された(圧力なしではなく)のはやっと四十有余年もしてからだったことである。国連に関しては、人間の最高の貴重品である道徳、名誉、権利に言及されるときが、いつでもわれわれにとり特に苦しかった。ある高位の党活動家の公の発言を思い出すが、彼はそのとき、アフガニスタンにおけるソ連軍限定部隊の活動に関連したわれわれにとって潰滅的ないつもの国際的投票の後、「これは成功である。われわれに対して十か国以上が賛成投票したではないか。われわれは孤立していたときもあったのだ」と述べた。ついでながら、われわれが一人ぼっちだったことはない。ソ連は国連で三票で代表されている。西はわれわれの要望を入れ、ウクライナ、白ロシア両共和国の国連加盟に同意したのだったから。

現在の資本主義は前世紀中頃や、世紀の変わり目、それに第二次世界大戦以前とも全く違う。資本主義は単に効率的な経済ではなく、社会的経済を創設し、単に法制国家ではなく、社会的福祉国家を創設した。資本主義はそのネガティブな特性から抜け出し、以前にはわからなかった質を獲得しながら発展している。これは部分的には自然な自己運動の結果生じ、部分的にはわが国が隣接して存在している結果生じた。わが国の社会的目的は実際的反面事例とともに資本主義がよい方向へ進化するのに役立ったが、ついでながら、この後段は社会主義については言えない。むしろ逆で、資本主義の存在は長い間旧指導部にとり国内のネジの締め上げに絶好の理由の役を果たした。われわれには他の社会システムに対する反感が極めて深く食い込んでいたので、われわれは資本主義の恐怖で自分自身を驚かしすぎたあまり、資本主義システムの健全な潜在能力を信じることができない。

資本主義の歴史的役割は今でも、資本主義が急速なテンポで生産力を高め、労働者を全面的に伸ばし、生産手段をより完全なものにし続けている点にある。この意味で、マルクスとエンゲルスが資本主義を科学技術進歩の推進力と特徴づけたのは今も完全にそのとおりである。税制をはじめ、ますます念入りになる経済的社会的法制、間接的調整などの国内外交によってブルジョアジーの上部構造は生産要因の活力を維持すると同時に、社会の退化を許さない。この退化は市場の全面的優位のもとでは十分に起こり得たであろうし、われわれまたはわれわれの多くはその不可避性を確信していた。

もちろん、資本主義は決してすべての面でその固有の欠陥と訣別したわけではない。わたしは西方を理想化する気は毛頭ない。わたしは西で六年間ソビエトの代表として生活し、働いた。そこにあるものの多くはわたしには受け入れられない。しかし、物質的豊かさの水準はもちろん、資本主義を構成する人道的民主主義的要素の強まりを否定するのは正しくなかろう。その上、実際上の成果について述べれば、それはわれわれには今のところ夢物語の世界なのだ。

Ⅲ

私有制が不都合になり、社会化が生産の社会的性格の発展の当然の帰結になるとき、社会主義は資本主義と交替する。そのような状況は労働生産性が何倍にも増えるという条件下で始まるであろう。私有制が支配的である間は、社会主義は問題にならない。

経済発展の資本主義的モデルと社会主義的モデルの違いは以下の点にある。すなわち、資本主義にあっては、経済は主に自動調整的市場基盤で、下から発生する経済的不均衡の衝突と均等化によって発展し、中央集権化した調整は従属的役割を果たす。社会主義にあっては、そ

の反対に、生産の複雑さと大規模なこと、生産の実際の社会化と細分化の不可能なことから、優勢な形態としての私有制に対する必要は消滅する（理論的に考えられているところでは。なぜなら社会主義は未だかつてどこにもなかったので）。そしてそれゆえに、中央集権化した計画は経済運営の主要な梃子である。もしも社会主義下で計画と市場の相関関係が前者に有利な五一対四九以下でないとすると、資本主義下ではそれは後者に有利で四九対五一以上ではない比率である。わたしはこの二％を社会主義と資本主義のドラマチックな差、量から質への移行点と呼んでいる。見てのとおり、僅少の差だ。

しかし、特にこれを強調するのだが、計画性と自然発生性の相関関係は恣意的、行政的ではない実際の社会化を反映しなければならない。その反対の場合には、戦時に私的経済を国家全体の目的に従属させる資本主義諸国は社会主義を達成し、次いでそれを放棄するということになるだろう。われわれのところでもほぼ同じようなことがあった。すなわち、強制的に（政治的だけでなく、経済的な意味でも）国内であらゆる私有財産を一掃し、未熟で準備不足の経済に全国民的財産のようにして国有財産を押しつけ、つまり、うたいあげた目的に形式的に接近し、われわれは新しい社会体制の勝利を宣言した。形式が内容を服従させた。実際には社会主義の前提条件の熟成度につれてわれわれは資本主義に甚だしく負けていたし、今も負けている。

生産手段にたいする社会的所有は社会主義の前提の一つにすぎない。それに社会的所有は否定的役割も果たすことができるのだ。他の所有形態の側からの競争を経験しない社会的所有は、国家が社会から遊離する独裁的政治制度の基礎になり得る。

これがどれほど逆説的に聞こえようとも、社会主義は意識的に作ってはならない。先ず第一に、誰も真の、本当の社会主義がどんなものかを知らない。この点でわれわれはマルクス・レーニン主義の創始者たちから汲み出せることはあまりなく、過ぐる七十有余年はお上が真理を独り占めにしていることにたいする、われわれの分をわきまえぬ要求の貧しさ、貧困さが示されただけだった。第二に、われわれが進む目的をはっきり描いていたとしても、目的とその達成の手段の間に不一致が存在する以上、どのようにそこへ達するかという問題が残る。社会主義は、資本主義が社会を新しい時代へ導きつつ燃え尽きて後に初めて名乗りを上げられる。これこそ社会主義の発展的な自然な誕生である。

社会主義は資本主義の深奥で完熟し、その最高段階で現実のものとなり、自分の五一％を得ると、もはやその先は自分の土台の上に発展し始める。強制、この悪名高き「歴史の助産婦」は社会主義の誕生に際して全く不必要である。資本主義は自分の先行きがなくなって新しい発展段階に場所を譲る。社会的所有が経済的に私的所有にとってかわる。射撃はここでは役に立たないし必要でもなく、資本家はラッダイトたらんには啓発されすぎている。客観的な歴史的必要性とは、あえて言いたいが、「自然な不可避性」、すなわち自然の法則に近く、それが社会主義に門を開くのである。

反対に、意識的な社会主義建設は、革命勢力がどうしようもないじれったさを処理できずに母なる歴史の胎内から未熟の胎児を取り出して、自分の手で、しかも短縮された期間にその子を育てようとするときに始まる。時間を早めるのが革命家たちの基本的モットーである。社会主義本来の経営メソードはまだ与えられていないとなると、「レトルト内で」の社会主義作りには二つの方式がある。一つは、えせ社会主義方式で、その非効率性についてはわれわれはすでに確認済みである。もうひとつは、恥ずかしながらも市場方式と呼ばれている資本主義的推進力への復帰である。一九二一年までわれわれは第一の方式を、ネップの期間は第二の方式を用いた。今われわれは再び第二方式歓迎を目にするが、われわれには断固としてそれに取り組む勇気が不足している。この不決断が克服されなければ、われわれはゴーゴリの素晴らしい「翔んでるトロイカ」とは異なり永久に立ち遅れを運命づけられ、ほかの民族や国家がわれわれの近くをどんどん通り過ぎて行く様を眺めるようになるだろう。

資本主義は自分なりに、資本主義的に社会主義を作り、静かに、自然に社会主義へ歩んでおり、それには非難されるようなものは何もない。われわれは他の道、つまり人命、資源、時間の損失の観点から恐ろしく無駄遣いの

強制の道を選んだ。以前われわれはこの差を知らなかった。「物知らぬ者は己の無知ゆえに幸せ」とはアラブの諺だ。しかし、ペレストロイカ、グラスノスチのもとにある今、真理と啓発の域はぐんと広がり、われわれには資本主義に対して旧態依然たる態度をとるべき根拠は何もない。西方は遙かに高度の物質的文化的発展水準にあるので、われわれよりも先に社会主義に達することもあり得る。しかしわれわれの立ち遅れや、われわれがずっと以前から自分を第一とみなしつけてきた世界での「第二位」という自覚は、心を恨みつらみで満たしたり、理性を曇らせたりするのではなく、吾人を英知へとうながすはずである。マルクス主義は今日、社会的経済的、政治的制度の相違とは無関係に、諸国が直面している諸問題の共通性を認識したり、肯定的経験を学び取ることのできる大規模な実験室のようにして資本主義を眺めるためにも存在する。

かつて先ずスターリンが初手に実行し、スターリン後には、事実を直視する勇気に欠けた連中、一度の欺瞞で催眠術にかかったまま次々に交代した指導者たちや彼らの学術コンサルタントたちが全く同様のことをやってきたように、戦術的目的のために社会主義の概念を複雑に操作するようなことをしてはならない。われわれはこのことをよく覚えている。建設された社会主義に関するスターリン神話をこれからも後生大事にすることは、社会主義思想を歪曲すること以外の何ものでもないだろう。

ペレストロイカは格別実践的な概念としてわれわれの生活に入った。それは何よりも古い経済メカニズムの崩壊と新しい経済メカニズムの創造を意味する。これには皆が同意しているようだ。しかし、現在の非能率的生産は、これまで慣れ親しんできた関係が破壊される結果、その非能率性をある期間持続するであろう。真先により高い質の一体化が達成され、一定の分解が始まるはずである。振り子が反対側へ揺れるためには、一旦止まらなければならない。われわれは丁度この一旦停止を体験しているところである。ゴルバチョフになぜ、数年たって経済状態が悪化したのかについて報告を求める者は、現実世界から望ましい世界へ瞬間的に跳び移ることの不可能なことが分からず、自らは自分の経済的ロマンチシズム（よい場合で）を示しているのか、発展の危機的正弦曲線の一時的落ち込みに悪のりして自身の政治的目的を追っているのかのいずれかなのである。

経済的誤りについて言えば、それは大変なもので、以下に述べることとする。

われわれは、比較的正しい路線を選ぶまでに凸凹道や窪みを通過し、つまずいたり、転んだりすることになろう。移行路というのは、出発点と終点の中間にあるのでそう称されるのだ。社会状態は曖昧模糊としており、社会制度は機構的にまだ最終的には形成されていないばかりか、後戻りもあり得る。本来的社会主義は、社会にとって不都合だという理由だけでは誰もそれを不安定化させることはできないだろう。だが、国家機構ががたがたであるとすれば、それは国家機構が今日現在社会主義的ではなく、社会主義への移行的機構であるという理由からだけである。

ペレストロイカを、社会主義の刷新または社会主義に新しい顔（民主的、人道的）を付与するものであるなどと格付けするのは善意によるものではあるが、正確ではない。一体、この世に存在もしないものをどのように刷新したり変えたりできるのだろう。そういう態度は、社会主義は存在する、実在する、それはただほんの少しだけ手を入れればよいのだなどと物事をひどく単純化するものである。ソビエト人は結局何を学んだのかというと、絶えず自分たちに押しつけられてきたスローガンは信じられないということを学んだのだ。

所有の問題

われわれが移行期にあるという事実は争う余地もなく、この事実を認識することにより、所有問題を別の角度で眺めることが可能になる。所有問題では何よりも私有制があげられるが、私有制はマルチ経済の下では社会主義からの後退ではなくて、社会主義への接近なのである。

先ず、西方で現在何が行われているかを見よう。

われわれが天文学から知っていることは、宇宙の深奥からの光りはその光りを送り出した星が存在を止めたあとも、なお少なからぬ時間残っているということである。

現代資本主義に関するわれわれの概念は、そこで生じた変化に比べて常に遅れていた。

国家独占資本主義または、経済学者好みに短く言ってGMK（＝国家独占資本主義のロシア語の頭文字）の特徴は国家が経済へ浸透しているということである。さまざまな所有形態における国有制の役割の拡大が長期にわたりこの浸透プロセスの基本であった。

しかし、あるときから資本主義経済では逆のプロセス、すなわち私有制の割合拡大が観察されている。ブルジョア筆者たちの評価によると、ほぼ到るところでプライベイト化、つまり、国有財産を個人の手に引き渡すこと、およびリプライベイト化、つまり、かつて国有化された財産を個人所有者に返還するというプロセスが表面化した。一九八四年に西欧十九か国の経済における国家セクターの割合は戦前からも含めて初めて漸減を示した。プライベイト化は発展途上諸国でも広まっている。これはもちろん偶然起きているわけではない。それは先ず何よりも、国営企業がしばしば経済主体として自分の一番よくないところを見せたからである。国営企業はいくつかの重要な指標で民間企業に負け、この低落は先ず予算から大量の助成金を出す必要が生じることに表われる。

しかし一方、私有制も必ずしも常に、どこでも正しいとは限らない。と言うのは、経済における国家の役割が増大したのは、まさに私的所有現象が生み出した諸問題に対する回答だったからである。ところが、この競争的プロセスで国有財産は異常肥大を遂げ、今度は不法に獲得した地位を明け渡している。

バッファロー出身のアメリカの鉄鋼家ケネット・リプキは、下層社会の出で、おそらくそのために、「ミスター百万長者」と呼ばれると満足感を味わったのだろうが、あるときわたしに（知り合いにもいろいろあるのだ）、もしも米国で彼の上に鉄鋼大臣が出現するようなことがあれば、自分はソ連に移民すると語った。なぜなら、ソ連でもいずれもう少しすれば関連の省が廃止されるだろうからと言うのであった。冗談はさておき、われわれは世界経済で起きていることの部外者でいることはできない。もう一つのことも正しい、すなわち、世界で起こっていることはすべてわれわれが自分の利害、可能性、目的の

プリズムを通して評価すべきだということである。

科学技術進歩の過程では、健全な競争に障害のない体制が勝ちを制する。サバイバル本能で前へ押しやられる商社は、多くの問題の解決法を模索している。そして最初に中間的決勝点に達する者が、ある一つのことを除きあらゆる富を手に入れる。ある一つのこととは名誉の上にあぐらをかく権利である。なぜなら、そこであぐらをかくような者は次の道程でもっとダイナミックな競争相手に確実に駆逐されてしまうからである。経済に最終ゴールはあまりない。その反対に、官公庁の独占権が支配し、その合目的性や自然発生、自然消滅の原則によらず、恣意的な、より正確にはワンマン的決定によって所有形態が決まるようなところの経済体制は失敗する。

この分野の氷はわが国でも動き出した。つい最近までわれわれは国有とコルホーズ所有という二つの社会的所有形態を知っていた。ついでながら、確定していた理論によると、生産の発展強化につれて第二の所有形態はその意義を失うはずである。現在状況は変化している。例えば、賃貸借などの他の所有形態が導入されたか、また

は検討されている。私有制についても真剣に語られている。

GMK（国家独占資本主義）を一瞥するだけで、われわれには資本主義の進化の過程で私有制も大きな変化を味わうということが分かる。私有制の諸形態は社会的分業に緊密に組み込まれ、十分効果的にその機能を遂行するか、その時点でもっと有望な別の所有形態に場所を譲るかする。資本主義は国有制を私有制へ、あるいはもっと正確には両者の競争的協力への各種の変換方法を二十二種類持っている。この経験は注意深く研究し、最近ある著名な経済学者がまたもや示したようなわれわれの古い病気に再度かかってはならない。彼はソ連における所有形態を五～六種類示して、われわれの状況はたった二つの形態しかない資本主義よりも複雑であると厳かに言明した。

西の私的所有者には多くの点で「お呼びじゃないよ」という表現があてはまる。彼はたとえ欲したとしても現在置かれている状況から飛び出して、過去によくあったように勝手気儘に振る舞うことは出来ない。社会的統制、

国と地方の法制それに市場が、彼の反社会的行為を抑制し、企業家団体そのものも所有者一族の名誉を傷つける身内にお灸を据える。前記のリプキは企業家の社会的責任に関する米国で有名な議案起草者の一人である。周知のように、企業家たちはとっくの昔に自分たちの権利を手に入れてしまっているのだ。

われわれの経済について言えば、所有問題は依然としてその根本で未解決のままであるが、それは私有制が実際上禁止されているからである。しかし、経済は強制を我慢できない。この分野では強制手段の発動で何かをすることが出来る、例えば、ある一点、ある具体的問題の解決に努力を集中することが出来る。命令を金科玉条に考える者はこの場合することは何もない。軍隊でさえ(特に戦闘中)命令だけに頼ってはいられない。兵卒の創造的判断力が必要である、すなわち、そのような判断力を発揮する条件も必要である。

なぜ封建主義は奴隷制度に勝ったのか。伝統的経済学にとってこれは明々白々である。なぜなら奴隷制度は生産力の発展を抑え、進歩にブレーキをかけたからである。奴隷は穀物を七袋集めたら、七袋全部差し出した。彼はその倍多く集めることも、半分しか集めないことも出来た。しかし、そのことから得られる利益も損失もなかった。奴隷は打ちのめせたが、彼に労働生産性を向上させることは不可能だった。

農民の労働はすでにもっと生産的だった。集めた七袋の中の一袋は自分のところに残しておけたので、もっと生産することに関心があった。十四袋なら二袋が手に入る訳である。結論—関心は強制より強し。この結論はその後封建主義に対する資本主義の勝利で断然確証された。その後、社会主義の番が来たかのように思われた。

すでに七十有余年が過ぎたが、われわれは、経済は露骨な命令は受け付けないということ、行政指導は生産と生産者にとり有害なこと、肝心なことは関心であるということをやっと認識し始めたばかりなのである。お役所的経済の本質は命令にあり、一方、効率的経済の戒律の第一は邪魔をしないこと、第二に助けること、そしてようやく第三に、これが最後の戒律らしいが、制限を設けるのである。経済は従属状態に置いておくべきではない。

経済自身が誰でも構わず自分の手の中に握っているのだ。

われわれは体制の改革者、刷新者だと名乗りながら、明瞭な矛盾におちいっている。われわれは一方では、多様な所有形態とそのためのさまざまな条件を認めると言明し、一方では、社会主義の道徳律にそぐわないかのような私有制にゴーサインを出さず、それによって経済競争にイデオロギー的投げ縄を投げかけている。

私有制は、あらゆる所有制と同じように、恣意的に取り上げたり、導入したりしてはならない。私有制は、その時点で達成された生産力の発展水準という客観的基礎を踏まえており、生きるも死ぬも自分次第である。この万物の自然の歩みに闖入するのは生産結果に好ましくない反応を招来する。この闖入は、これは現実によって鮮やかに示されたが、私有制を経営不良状態に追い込むことしかできない。

同じことがわれわれの社会にも言える。私有制は人工的に導入すべきではなく、わが国の歴史的発展により出来上がった範囲内でその自己運動のための条件作りをする必要がある。概して、私有制はすでにソ連に存在しており、その高い効率性のゆえにこそ存在しているのだが、それは合弁企業での外国商社の参加という形態でのみ許されているのである。ソ連人にとってそれはまだまだ未知の分野—terra incognita である。

協同組合所有制について若干述べる。現在、協同組合に関する世論は分かれている。例えば、国内各地のストライキや騒動の過程で協同組合は襲撃さえ受けた。全面的物不足の下で多くの協同組合が投機的性格を示していることは争う余地もないが、これはまだ協同組合運動全体を縮小すべきだという口実にはならない。国が味わっている危機の諸原因はもっと深いところにある。われわれの経済構造は、国民に必要な商品の生産、配送、販売を必要なレベルで行うのに不適当だということがわかった。これらの機能は残念ながら闇屋が引き受けて、部門別、地方別などの経済的不均衡の何らかの部分を矯正(!)している。企業や部門、地域などの仕事とか国の情勢については、工作員のしたり顔の誇大報告を見て判断するのではなく、協同組合においても盛んな闇の規模

を見て判断する必要がある。現在わが国では会計報告の簡略化が主張されている。すなわち、会計報告書には闇の水準という欄が一つあれば十分なのであり、これは事態が悪いことの確実な証左である。物不足は闇屋にとり、甲虫に馬糞（＝猫に鰹節）なのだ。寄生虫が最も困難な時期に増殖するのも訳あってのことである。これまでもあらゆる時代、あらゆる国民のところでそうだった。その反対に、きちんと組織された経済にあっては闇屋は死滅する。よい経済は闇屋には殺人的環境なのである。

協同組合を一掃しても、われわれはより豊かになるわけではない。しかし、協同組合を本当に効率的な個人企業に部分的に取り替えて行けば、情勢の根本的な健全化も可能だろう。私有制は一生にわたる自分の血と汗の結晶を作ることを見込んでいるうえ、それは後継者へ代々引き継がれて行くのに対して、協同組合の大多数は自分の目的をこれとは別のことに見ている。すなわち、情勢に便乗して大儲けすることが狙いで、あとは野となれ山となれなのである（明らかに、これらの代用品は国民経済の確固たる支柱にはなり得ない）。

社会の経済的基盤、つまり所有構造の改造と競争基盤に基づく個人経営の導入は、単に現存体制の維持に必要だというのではなく、このことは国全体の保全よりもずっと重要なことなのである。こうした考えは一見誇張のように思われようが、事態は正にそうなのである。

国家の経済基盤は、その国の地域別・部門別のあらゆる経済内関係の相互関係が自然である限り強固である。自然性は効果を生み出すが、強制は崩壊を生む。歴史は、火と剣で創設された強大な帝国が自らの重みを支えきれずに崩壊した例で満ち満ちている。十一～十二世紀の古代ロシア国家は経済的理由により、大公の意志に反して崩壊した。この後、ロシアの諸地域が再統一されるまでに少なからぬ時間が経過した。流れに逆らって泳ぐことは可能だが、経済法則に反して行動するのは徒労である。

自己保存という気がかりな問題はソ連国家の視界内にも発生した。われわれは最早この問題を認めずにはいられないし、それにどのように対処するかにわれわれの運命がかかっている。

現在の経済の相互関係は、内部爆発の試練に耐えきれるほど強力ではない。国家の保全を脅かすのは、民族間の対立やそれに結びついた分離主義的志向ではなくて、大国がつぶれればどの民族も取り返しのつかない経済的損失を避けられないということを自覚していないということである。経済の現状にとって特徴的なことは不合理、恣意、領有権の制限、一面的な専門化、科学技術の進展にたいする刺激の喪失、農村の崩壊等々である。経済は問題を解決するよりも、むしろ作り出している。これはすべて行政指導的統治方法の結果である。

かつて、計画立案は統一を保障するとみなされていたが、この統一は形式的なものだということがわかった。実際上われわれは分離隔絶状態、民族間の不和を抱えている。今や、従来の中央からだけの全体的計画立案路線は継続すべきではないということが誰の目にも明らかになった。諸共和国、その他の地域にたいして経済的独立が与えられ、地域的独立採算制が導入されている。しかし、現地では相変わらず地方官僚主義が生産に君臨し、生産者の勢力の著しい部分が競争相手との戦い――これは進歩の源泉であるのだが――に向けられるのではなく、上部からの指令の遂行に向けられている。

中央集権はもちろん経済分野をも含めて必要だが、それは地方行政機関の自主性を制限するものであってはならない。

健全な経済メカニズムを建設する前提となるものは、経済的自由を経済主体、企業、個人に与えることに尽きる。それは機織りの梭（ひ）のように作動しながら、モルダヴィアからチュコトカまで、エストニアからエレヴァンまでの全域を一枚の経済の布に織り上げ、国家が権利として持っている調整役を国家と張り合うことなしに、どのような強制もなしに、未来の諸部門を創造するであろう。今まさに、道に迷った旅人が手綱をゆるめ、馬が自分で道をみつけるときが来たのだ。自由は実際的なもの、すなわち、私有制も含めてさまざまな所有形態の共存に基づいたものでなければならない。このような共存は全連邦的分業の形成、単一全体的なもの（単一市場と単一経済）の創設に至るであろうし、その暁にはもう誰もそれを否定しようとはしないだろう。そんなことをすれば自身の経済的退化というしっぺ返しを受けることになるだろう

から。どのような離脱も全体よりも部分にたいする痛打になるだろう。

そのような改変から私企業を排除すれば、改変はあらゆる意味を失い、ちょうど、きわめてポピュラーな候補者を大統領選挙に、有能な挑戦者を試験に、強い選手を競技に登場させないのと同じようなことになろう。新しい経済基盤が最低の安定度を獲得し、崩壊の危険が消滅するのはいつかは言い難い。早ければ早いほどよい。国家の統一性は出来上がったシステムの担保にされてしまったが、そのようなことが長く続くことはない。私有制の許容は、資本主義から社会主義への移行体制であるわが国の社会政治システムをいくらか変形させるだろう。このことには恐ろしいことは何もない。反対に、私有制は遠心的傾向に対抗して経済を安定させ、国家を強化するであろう。これは明日はもっと高くつくことになるだろうから、今すでに支払うべき対価である。わたしはスターリン型の独裁復活を念頭に置いている。経済は認識不能であり、最初から最後まで全体の予見はできない。こんなに複雑な状況下にあってはこの分野での誤りは、非常に大きな誤りでさえ不可避であり、それゆえに許されるべきものである。われわれは経済についてあまりよく知らない。この見解に不賛成の人たちには、経済にたいして百%の裁量権をもっているわれわれは一体なぜ豊富な食品を実現できなかったのかという質問を呈することができよう。例えば、食品の種類をとってみると、今の世代は前世代に比べて貧しく、若い人たちは多くの食品については耳にしたことすらない。誤りはもちろん不可避である。しかし、周知のとおり、次から次に誤りを重ねる棋士は対局に勝つことはできない。

（サハリン州知事、経済学博士）
（おがわ まさくに・創価大学教授）

付記

一九九一年三月五日、私はユージノ・サハリンスクのサハリン州庁知事執務室で本論文の筆者フョードロフに面会した。青い目、赤ら顔をした五十代半ばの、小柄な、いかにも研究者らしい人物であった。

私はペレストロイカの核心とも言うべき私有財産の問題について質問した。これにたいして彼は、結局のところ私有財産をみとめ、資本主義（市場経済）的方向に向かうべきであると答えた。ただし移行にあたっては段階を踏むべきだ、国有の大企業、大農場は今のところそのままにして、私企業的な中小企業育成を成功させ、大企業の方も自然に市場経済に向かわざるを得ないようにすべきだとの見解をのべた。

北方領土について、即時返還が難しければ、段階を踏んだらどうか、例えば当分の間共同領有するのはどうかと聞いた。彼は言った。「それは同じことだ。日本人との共同領有は困難だ。というのは短期間のうちに日本人の企業力と勤勉と資本にすべて吸収されるだけの話だ。したがって自由経済地域をつくるとすれば、クナシリ、エトロフだけでなく、隣接する北海道の一部を加えるべきだ」。要するに、北方領土を日本の要求通りに即時返還すべきだとは言わなかった。このフョードロフ氏の基本的な考え方は、今春、四月にゴルバチョフ大統領に先立って来日した折にも、日本記者クラブでの会見で披瀝された。云く「ソ連大統領が日本側の要求を受け入れれば彼は失脚するだろうし、日本の指導者たちも領土問題を放棄するなら同様に権力の座からころげ落ちてしまう」（毎日新聞・四月十六日付朝刊）したがって「『領土問題のセンセーショナルな決着は期待できない』と、述べたうえで、『ソ日双方の妥協が必要だ。今日的な解決の道を探らなければならない』と主張した」（朝日新聞・同右）とある。これがあの時（三月五日）私が聞いた「自由経済地域」という発想であろうと思われる。すなわち「北方四島の属するサハリン州の一部と北海道を経済的に統合するという形で国境の変更にこだわらない欧州型の自由貿易圏の確立」（日本経済新聞・同右）である。

別れぎわに、ここに紹介する彼の論文（パンフレット）に署名して贈ってくれた。それは、モスクワ「知識」出版所発行の月刊「社会主義の理論と実践」シリーズに掲載されたものであり、編集部でも「ソ連社会の本質と発展の展望に対する多種多様な観点を代表する一連の論文」の嚆矢として位置づけているものである。因みにその冒頭の記述によれば、「わが国における社会体制の本質に関する問題は、今日理論的意義だけでなく、大きな

実践的意義を持っている。ペレストロイカの運命は多くの点で正しい座標軸の選択、すなわち人間味のある新たな社会へ向かう最良の道の出発点が正しく選択されているかどうかにかかわっている。われわれははたして社会主義を建設したのだろうか。そして、もしも建設したのだとしたら、どのような社会主義を建設したのか。この問題は哲学者、経済学者、政治学者をはじめ社会全体の関心の的になっている。その回答如何により、国家の性格や統治方法、市民の自由と権利、経済モデルその他の性格にかかわる他の多くの焦眉の問題が生じる。編集部はこの問題に対する強い関心を念頭に、ソ連社会の本質と発展の展望に対する多種多様な観点を代表する一連の論文を刊行する予定である。このテーマの対話をV・P・フョードロフの小冊子『経済の力は自由にあり』を以て開始する。編集部は読者の討論参加を希望する」とある。ホテルに帰ってから通読してみて、説得力のあるすぐれた論文だと思った。私自身、多くの点で蒙をひらかれる思いがした。サハリンを立つ前に電話で、あの論文を日本で紹介してもよいかとたずねた。彼は答えた。

「そうなればうれしい。私にとって大きなはげみになる。」

私はフョードーロフの理想をもった生き方に感銘をうけた。これは十九世紀ロシアのすぐれた革命家たちと共通するものかも知れないと思った。そこになにか使命感が感ぜられる。シベリアのヤクーツク付近の寒村に生まれ、モスクワのプレハーノフ経済大学を卒業後、ヤクーツク自治共和国のゴスプランに勤務したのち、世界経済・国際関係研究所の研究生となり、三十七歳でドクターの学位を得た。その後六年間、西ドイツに留学、各地を旅行し、戦勝の母国と敗戦のドイツの生活水準が何故にかくもちがうのか、という問題を考えつめたという。しかし、ここまでの経歴は別に驚くにあたらない。問題は、彼が母校である経済大学教授の地位を投げ出し、かつては流刑人の島であったサハリンに移住したことである。彼はサハリンで自分の考える自由経済のモデルをつくって見せるとの理想に燃えて、サハリン州知事選に出馬したのである。中央直結の、口約束をばらまくだけの出世主義者たちにあきあきしたサハリンの住民は、「サハリンは

サハリンの住民のものだ」と言い切るフョードロフを歓迎し、一九九〇年四月十八日、州知事に就任したのである。

しかし中央だけでなく、サハリンも頑固な保守派にこと欠かないだろうし、天然資源はあっても資金はなく、生活必需品はなにも産しないサハリンの実情からみて、彼の理想の実現が容易でないことは充分察せられる。

フョードロフの果敢な挑戦に声援をおくるのは私だけではないだろう。

一九九一年九月　　加藤　九祚（創価大学教授）